THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES
親鸞仏教センター通信
2018年3月1日発行
発行者　本多 弘之
編集・発行　親鸞仏教センター（真宗大谷派）
〒113-0034　東京都文京区湯島２-19-11
TEL. 03-3814-4900　FAX. 03-3814-4901
e-mail　shinran-bc@higashihonganji.or.jp
ホームページ　http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp
Facebook　http://facebook.com/shinran.bc
2018.3
第64号

宗教を具体的に生きていくということ

親鸞仏教センター研究員　戸次 顕彰

「今更、心より踏めとは申さぬ。ただ形の上で足かけ申したとて信心に傷はつくまいに」
「我々とて本意から転べとは言うてはおらぬ。ただ表向きな、表向き転んだと申してくれぬか。あとはよいように、するゆえ」（※引用者注：転ぶとは棄教のこと）
「ほんの形だけのことだ。形などどうでもいいことではないか」
「形だけ踏めばよいことだ」
（新潮文庫『沈黙』より）

親鸞仏教センターの研究会で、遠藤周作の文学にふれる機会があった。キリスト教の神父の体験を通して日本人の宗教性について考えるためである。そして数日後、この学びを機縁として、当センターの研究員・職員一同でマーティン・スコセッシ監督の映画「沈黙―サイレンス―」を鑑賞した。信仰に生きること、それを弾圧すること、さらには殉教や裏切りなど、さまざまな課題を含んだ作品である。そのなかでどうしても気になる言葉があった。そこであらためて小説『沈黙』を読んでみたら、やはりあった。「形」や「表向き」という言葉である。

冒頭の引用は、小説のなかで、踏み絵を迫る日本の役人や通辞が、主人公ロドリゴ神父に語りかけた言葉である。「ただ形の上で」「表向き」「ほんの形だけ」と言って踏み絵を迫っていた。形式とか表向きとか、そういう問題ではないのだろう。でも読者・視聴者の立場として、これ以上の残酷な光景は見たくないという願いもある。

宗教において、また信仰において、こころや精神の問題はもちろん重要である。しかし、だからといって「形」や「表向き」の行為が二次的なことになるとは限らない。踏み絵という具体的行為をめぐって「形などどうでもいいことではないか」と通辞は言うが、そもそも心より踏むことと、形式的に踏むことに違いなどあるのだろうか。

ところで、ある中国人仏教者が仏道を説明する際に中国古典『韓非子』の故事に言及している箇所を最近目にした。その故事によれば、王がある画家に最も描きにくい絵は何かと問うたのに対し、画家は「犬馬最も難し」「鬼魅最も易し」と答えたという（岩波文庫『韓非子』第三冊、34頁）。犬や馬は我々の身近に具体的な形をもって存在しているからである。一方の鬼魅の類はそうではない。だから描きやすいのである。仏道のことで言えば、抽象的な事柄よりも具体的なものこそ考察しがたいというメッセージとしても受け取ることができる。宗教を具体的に生きていくことの意味を考えていく機会をもらった。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの―『大無量寿経』を読む―」㊸

大悲を行じて生きる

親鸞仏教センター所長　本多 弘之

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの―『大無量寿経』を読む―」の第106回と第107回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、106回では「智慧、大海のごとし」等について、107回では「方便の力」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第104回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員　越部 良一）

■浄土は大慈悲から生ずる

天親菩薩の『浄土論』の中に浄土の性（しょう）功徳というものがあって、「正道大慈悲　出世善根生（ぜんごんしょう）」（『真宗聖典』135頁、東本願寺出版、以下『聖典』）と。つまり、浄土の性は大慈悲であって、浄土は大慈悲によって生み出されているのだと。その言葉を曇鸞大師が注釈して、大悲ということは、小悲や中悲ではないのだと言っています。大悲は、如来の慈悲であって、これは無条件の慈悲です。衆生の分限で起こす慈悲は条件付きの慈悲です。ですから、本願の大悲は徹底的にそうした凡夫の有限性を批判して、大悲の場所を開こうと、呼びかけてくる。これはなかなか凡夫にとっては信じがたいし、受け入れがたい。

親鸞聖人は、「一如宝海（いちにょほうかい）よりかたちをあらわして」（『聖典』543頁）と言っておられますが、この大悲が起こるのは、如が動くという発想なのです。真如平等や、法性平等などと言うのですけれど、法の本来性、存在の本来の在り方は、平等であると。しかし、現実には我々はあらゆることが違う。自我があって、他とはどうしても一緒にならない、そのような問題を抱えて生きている。それに対して如来は、本当は平等であり、大悲が呼びかけている世界に触れなければならないのだと言うのです。そうでなければたすからないのだと、こう呼びかけてくださる。宗教的要求というのは、こうした大悲が呼びかける世界が欲しいということです。

■大悲を行ずるとは大悲を信ずること

大慈悲ということは、如来が大慈悲であって、凡夫から大慈悲を起こすことはできないのです。凡夫は有限の限定された身を生きているのですから、これがそのまま無限には絶対にならない。それで、大慈悲が課題になっていても、我々は自力で大慈悲に立てるわけではない。でも、無限からは、有限を外して無限があるのではない。有限はすべて無限の中にある。だから「大悲を行ずる」（『聖典』247頁）ということが『教行信証』の「信巻」にあるのですけれど、大悲を行ずるということは、凡夫が行ずるわけではない。大悲が凡夫を通して大悲を行じようとする。

それは、本願が行として「南無阿弥陀仏」を行ずる。つまり、「南無阿弥陀仏」を行ずる主体は本願なのです。凡夫が行ずると考えると、これは小さな行になって大行ではなくなる。我々が行ずるとすると、念仏では物足りないとか、念仏なんかたいしたことないとか、そのような発想になって、それで難行苦行してあたかも自分が無限にまで行けると発想するけれども、有限でしかない人間が無限には行けないのです。そのような問題を突き詰めて、大悲を行ずるということは、大悲が

行じてくる。大悲の本願が呼びかけてくださる行を、我々はいただいて生きる。そのように発想して、現生の利益として「常行大悲の益」（『聖典』241頁）、常に大悲を行ずる利益ということを親鸞聖人はおっしゃるのです。

それは、大慈悲を信ずるということです。信ずるということが、自分に大悲が行じてくるということです。そして、自分がその大悲を行じて生きるということがあると、それが大悲に触れたいと思う人々に自ずから伝わっていくのです。

■願海平等なるがゆえに発心等し

有限な凡夫が意志をもって大悲を伝えるとか、そのようなことはできないわけです。できないものをできるように思うのは間違いなのです。凡夫であるという身において大悲をいただく。大悲の中にあると信ずる。そうすると、そのことが有限に苦しんでいる人々に、「ああ、大悲が自分のうえにはたらいてくださっているのだ」という考え方を学ぼうとする動きが起こるわけです。起こってくることにおいて大悲が行ずる。このように言うことができるのだろうと思うのです。

つまり、大悲というものがあって、という発想ではないのです。大悲は、はたらきとなって我々にくるわけです。大悲がどこかにあるのではない。我々のこの存在構造の中に、有限であることを包んで大悲がある。大悲はそのようにして、あたかも場所、浄土の場所のごとくにして我々にはたらいてくる。こういうことが、衆生において大慈悲心を得るという意味になるのだろうと思うのです。

我々自身の心の本質が大慈悲心になるわけではない。我々はどうしても有限性をもっている。小さな心しかない。分別する心、計算する心、汚い心しかないわけです。だけど、実はそこにはたらきかけている大きな心がある。如来の本願が立ち上がって我々を救わずにおかんと呼びかけてくださる。それを親鸞聖人は「願海平等なるがゆえに発心等し」（『聖典』242頁）とおっしゃるわけです。

（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

（2017年11月～2018年１月）―抄出―

■2017年

11/ 7　第106回（通算第157回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

11/ 7　第206回英訳『教行信証』研究会

11/10　ご命日のつどい

11/14　第６回「三宝としてのサンガ論」研究会

11/20　第19回「『教行信証』と善導」研究会

11/28　第182回清沢満之研究会

11/30　第13回研究員と読む公開講座「親鸞の浄土観―『教行信証』の仏身仏土の巻を読む―」担当：青柳研究員①11/30 ②12/ 7 ③12/14 ④12/21

12/ 2　第16回東アジア仏教研究会（駒澤大学大学会館）：戸次研究員がコメンテーターとして出講

12/ 4　第207回英訳『教行信証』研究会

12/ 4　第107回（通算第158回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

12/ 8　ご命日のつどい

12/ 8　近現代『教行信証』研究検証プロジェクト「『教行信証』研究をめぐる諸課題」大谷大学教授：三木彰円氏（文京区・親鸞仏教センター）

12/ 8　平成29年度西山学会研究発表大会（誓願寺）：中村嘱託研究員発表「證空の末法思想―『自筆鈔』／『他筆鈔』の相違に着目して」

12/13　第58回現代と親鸞の研究会「心の哲学と幸福論」慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科委員長、同研究科教授：前野隆司氏（文京区・親鸞仏教センター）

12/18　第20回「『教行信証』と善導」研究会

12/19　第７回「三宝としてのサンガ論」研究会

12/22　親鸞仏教センター報恩講

12/25　第183回清沢満之研究会

■2018年

１/ 9　第208回英訳『教行信証』研究会

１/ 9　第108回（通算第159回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

１/11　第13回研究員と読む公開講座「清沢満之と浄土をめぐる問い」担当：長谷川研究員①１/11 ②１/18 ③１/25 ④２/１

１/12　ご命日のつどい

１/24　第21回「『教行信証』と善導」研究会

１/26　第８回「三宝としてのサンガ論」研究会

１/30　第184回清沢満之研究会

現代と親鸞の研究会

本研究会では「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘を問題提起していただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第57回

遠藤周作と井上洋治の思索

―現代日本人に南無の心に生きる喜びと平安を届けるために―

ノートルダム清心女子大学教授
山根 道公 氏

山根 道公（やまね みちひろ）氏

1960年岡山県倉敷市生まれ。日本近代文学者。早稲田大学第一文学部卒業。立教大学大学院修士課程修了。「遠藤周作 その人生と『沈黙』の真実」で梅光学院大学より博士号（文学）を授与。

1986年より井上洋治神父主宰「風の家」機関誌『風』編集。1998年ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所講師、2007年同准教授を経て、現在はノートルダム清心女子大学副学長・キリスト教文化研究所教授。

著書に『遠藤周作その人生と『沈黙』の真実』（朝文社 2005年、日本キリスト教文学会奨励賞を受賞）、『遠藤周作『深い河』を読む マザー・テレサ、宮沢賢治と響きあう世界』（朝文社 2010年）、共著に『風のなかの想い キリスト教の文化内開花の試み』（井上洋治共著 日本基督教団出版局 1989年）、『イーハトーヴからのいのちの言葉 宮沢賢治の名言集』（山根知子共編著 角川書店 1996年）など多数。『遠藤周作文学全集』全15巻（新潮社）編集協力、解題担当。『井上洋治著作選集』全10巻（日本基督教団出版局）編者、解題担当。

2017年９月８日、ノートルダム清心女子大学教授である山根道公氏をお迎えし、「遠藤周作と井上洋治の思索」というテーマのもと「現代と親鸞の研究会」を開催した。氏は遠藤文学研究の第一人者であり、また遠藤と共にキリスト教の福音を日本人の心に届けようとした神父・井上洋治と出会い、２人の志を受け継がれた方である。

今回は、遠藤と井上の生涯を追いながら、２人が共に課題とした事柄について、浄土教との関連なども交えながら丁寧にお話いただいた。ここにその一端を報告する。

（親鸞仏教センター研究員　青柳 英司）

■遠藤周作の生涯と課題

遠藤周作は大正時代の終わり、1923年の生まれです。伯母の影響で母親が熱心なカトリックとなり、遠藤も母の促しで中学２年のときに洗礼を受けました。一時期は司祭を目指したこともあったようです。

遠藤にとってカトリックの信仰は、母親が自分に着せてくれた服のようなものでした。ですが思春期に入ると、カトリックの思想に距離を感じるようになります。まるで、ダブダブの洋服を着ているような違和感があったと、遠藤は後に語っています。そこで遠藤は戦後すぐ、キリスト教との距離を埋めるためにフランスへ留学しました。その船中では偶然、生涯の同志となる井上洋治と出会いました。

しかしフランスでは逆に、キリスト教との距離が広がってしまいます。遠藤は、西欧文化に身を置けば、そこに馴染（なじ）んで洋服を着こなせるだろうと思っていました。ですが逆に募っていったのは、西欧キリスト教の文化的背景と自分が背負っているものとはまったく違うという実感だったのです。

遠藤は1953年に、肺結核のため帰国します。このときから遠藤は、キリスト教を自分の血の中にあるものでとらえ直して実感のもてるものにするという課題を背負って、小説を書き始めました。母親が着せてくれた信仰という洋服は、自分の身の丈に合わせて和服に仕立て直す必要があったのです。その努力をしてもうまくいかないのであれば、脱ぎ捨てるしかない。けれど、何の努力もせずに捨てるということは、母への愛着から遠藤にはできなかったのです。

しかし、1960年には肺結核が再発します。当時の結核はまだ、死に至る病でした。遠藤の妻の順子夫人が、夫は二つの贈り物を神様からもらったと言って

おられました。一つは文才で、もう一つは病気と。死と向きあう病気が遠藤文学を深めたことは、事実です。

なぜ人間に苦しみが与えられ、その現実に対して神は沈黙しているのか。神はどこにいるのか。これは、遠藤にとって切実な問いでした。いくら祈っても、神は現実を変えません。ですが遠藤は、苦しんでいる人間に寄り添う神を見いだします。人間は独りで苦しんでいるのではありませんでした。その苦しみを共に分かちあっているキリストの眼差(まなざ)しに、遠藤は病床体験のなかで出会ったのです。

遠藤の３回目の手術は、極めて危ないものだったそうです。成功するかどうか、五分五分というものでした。寝たきりのままか、危険な手術を受けるか。でも遠藤は、寝たきりのままで小説が書けないのは嫌でした。人の苦しみに寄り添う同伴者としてのイエスを、小説に書きたかったのです。自分から申し出た３度目の手術で遠藤の心臓は、数秒の間止まってしまったそうです。けれど遠藤は、死の淵(ふち)から生還しました。やっと実感できたイエスの顔を、遠藤は小説に書きたかったのです。その意欲が、彼を生還させたのではないかと思います。

こうして世に出されたのが、『沈黙』でした。

■井上洋治の生涯と思索

井上洋治は1927年の生まれですので、遠藤の４歳年下になります。若いころは虚無感に苦しみますが、修道院に入った姉に紹介された小さき花のテレジアの『自叙伝』を読み、そこに光を見いだします。そして、テレジアと同じカルメル会の修道士となるため、フランスへと渡りました。その船中で遠藤周作に出会ったことは、先に述べた通りです。

しかし、フランスの神学校で、トマス神学に基づく教科書を丸暗記させる教育は、井上にとっては精神的な拷問であったようです。

転機が訪れたのは1955年に東方キリスト教の講義を聴いたときでした。そこで、グレゴリオ・パラマスの汎在神論に出会ったのです。汎在神論とは、すべてのものは神の中にあるという思想で、イエスの教えやパウロの言葉の中に見いだせるものです。これによって井上は、精神的な解放を得ました。東方には西欧と異なるキリスト教のとらえ方があるように、日本にも日本的なキリスト教のとらえ方があってよいという思いに至ったのです。それから井上は日本に戻り、日本人としてキリスト教を原点に立ち戻ってとらえ直そうとしました。キリスト教を日本人の心情で噛(か)み砕いて自分のものにし、日本語で表現しようとしたのです。それを井上は遠藤と共に、自分の使命としたのです。

しかし、キリスト教の仕立て直しの第一作といえる『沈黙』が世に出たとき、日本のキリスト教界から轟々(ごうごう)たる批難が沸き起こりますが、井上は遠藤を擁護できませんでした。そこから井上は、遠藤のキリスト教のとらえ方が聖書に則ったものであることを伝えるために、あらためて聖書学を学び始めます。

そのなかで重要だったのが、聖書学者エレミアスの「イエスが示した神はアッバと呼べる神」だという指摘でした。「アッバ」とは「お父ちゃん」くらいの言葉です。幼子が父親を呼ぶ言葉なのです。

また、井上は法然の思想にも触れ、大きな衝撃を受けました。法然の姿が、イエスと重なったからです。宗教者として生きるうえで何を大切にすべきかを、自分は法然から教えられたと言っています。そして1999年、けやき並木を散歩中に風の音を聞いて、「南無アッバ」という言葉を感得しました。信仰に生きる喜びが、「南無アッバ」という表現になったのです。以後「南無アッバ」の祈りに生きるということが、井上の信仰の中心になりました。井上の最期の言葉も、この「アッバ」という親しい神への呼びかけでした。

彼は日本文化の中でキリスト者として到り着いた一つの姿を、私たちに示してくれた宗教家でした。

（文責：親鸞仏教センター）

研究会の様子

※山根氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第39号（2019年６月１日号）に掲載予定です。

「近現代『教行信証』研究」

検証プロジェクト

『教行信証』研究をめぐる諸課題

大谷大学教授
三木 彰円 氏

「近現代『教行信証』研究検証プロジェクト」では、2017年12月８日、親鸞仏教センターを会場に大谷大学教授の三木彰円氏をお招きして研究会を開催し、「『教行信証』研究をめぐる諸課題」という題のもと講義をいただいた。氏は、2011年の宗祖親鸞聖人750回御遠忌の記念事業である親鸞自筆の坂東本『教行信証』の修復・翻刻に長年携わってこられた。このたびの講義では、その成果を踏まえ、今後の『教行信証』研究にいかなる課題が見いだされてくるのかについてお話しいただいた。ここにその講義の一端を報告する。

（大谷大学真宗総合研究所東京分室PD研究員　藤原 智）

三木 彰円（みき あきまる）氏

1965年宮崎県生まれ。1993年大谷大学大学院文学研究科博士後期課程（真宗学）単位取得退学。文学修士。大谷大学講師、同准教授などを経て、2016年より現職。

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌の記念事業として展開された『教行信証』「坂東本」の御修復事業（2003年７月から2004年７月）に携わられ、そこで得られた知見や成果の内容を、『真宗』誌等、各地で広く公表されている。

2013年２月には、親鸞仏教センターが主催する『教行信証』真仏土･化身土巻研究会へご出講いただき、「『教行信証』の諸問題―親鸞自筆・坂東本を通して―」のテーマのもとご講義をいただいている（講義録は『現代と親鸞』第27号に収録）。

著書に、『『坂東本･教行信証』と親鸞聖人』（2009年、難波別院）、『テキスト　唯信鈔文意　唯信鈔』（2010年、難波別院）、『テキスト　一念多念文意』2012年、難波別院）、『テキスト　尊号真像銘文』（2013年、難波別院）、共著に『ブッダと親鸞』（東本願寺出版部）など多数。

また、2007年８月から2009年６月まで、機関誌『真宗』に「『坂東本･教行信証』と親鸞」をテーマに連載。

■教学史の検証の必要性

今回は、『教行信証』に私なりに向き合ってきたなかで、今後の研究の課題となるような事柄についてお話をいたします。

私が真宗学に関わり始めた当時、廣瀬杲（たかし）先生が、真宗学の大きな問題性の一つは教学史がないことであるとよくおっしゃっておられました。特に大谷派のなかでは十分にはないのです。ただ、教学史を検証していこうとしますと、どうしても教団史が踏まえられなければならないということ、さらには近代における明治以降の時代状況にまで目を向けなければならない。そういうなかで、近現代の『教行信証』研究を見ていこうとするときには、やはり江戸期の宗学というものを十分に踏まえなければなりません。

■江戸期に『教行信証』は読まれなかったか？

何となく私たちの通念として、『教行信証』は江戸期には読まれなかった、という漠然とした感覚をもってしまっています。確かに、安居（あんご）の場で『教行信証』が講ぜられることはありませんでした。その代わりに『浄土文類聚鈔』（以下『文類聚鈔』）が安居の場で取り上げられていった、ということがよく言われます。けれども、実際どうであったのかと言いますと、江戸期にも『教行信証』関係の著述はかなりの数が出されています。では、一体なぜ江戸期に『教行信証』を安居で講じることはなかったのか。本当に『文類聚鈔』が『教行信証』に代わるものとして取り上げられたのか。ここに関係してきますのは、「相伝」のなかで『教行信証』が伝授のものとしてあるということです。そのあたりのところを、大きな背景として見ていかなければなりません。

『教行信証』というのは、覚如が大町の如道という人に伝授をおこなっているという記録が残っております。蓮如上人以降の「相伝」のなかで『教

行信証』の素読と科文の立て方を伝授していく、その源を辿ると覚如の『教行信証』伝授にまで遡るということは十分にありえます。一方で、『教行信証』のテキストを見ますと、少なくとも覚如から存覚のころには延書きが作られていく。そこに『教行信証』を読むということが、それなりに限定した形でおこなわれていく。やがてそういうなかで、私たちが「相伝」と呼んでいる形での学びがおこなわれていきます。

大谷派の学問の初期のころには、「相伝」に関わった学僧たちがずいぶん重きをなしておられます。ですので、そういうものは当然高倉学寮のなかにも認識される状況としてはあるわけです。ですから講録類などを見ておりますと、「相伝」の解釈を出しまして、それに対して批判的な形で指摘をして、別の教義了解をおこなっていく。こういうことはかなり頻繁におこなわれております。そういう意味では「相伝」というものも江戸期には、かなり周知できる状況にはありました。

それでは、『教行信証』がなぜ安居で講ぜられなかったのか。それはやはり「相伝」の伝授ということが大きな重さをもっていたのではないかという気がいたします。一方で「相伝」の学びのなかでは『文類聚鈔』を非常に重要なものとして見ています。『教行信証』はあまりにも広博であって、容易に受け止めがたいものと思われて親鸞聖人が晩年に『文類聚鈔』をわざわざお作りになったという『教行信証大意』の記述があります。それは蓮如上人が『文類聚鈔』を重視する視点になっていきます。さらにはそれを受けた「相伝」も『文類聚鈔』は『教行信証』以上に重要なお聖教として見ていく。そうしますと、安居のなかで『文類聚鈔』を講じていくというところに脈絡がある可能性はあると思います。『教行信証』の代わりに『文類聚鈔』という面もありますが、『教行信証』の代用として『文類聚鈔』というわけでもない。その「相伝」から高倉へ継承されていくものが、考える視点になっていく気がいたします。

■『教行信証』公開という願い

『教行信証』をはじめ、テキスト一つにとりましても、あるいはそれに対する研鑽の在り方に対しましても、まず事実確認とそれを掘り起こしていく作業が非常に多岐にわたるものとしてある。そのなかで明治以降の特記すべき事柄は「公開」ということです。これが近代の教学研究の根っこにあるという感じがします。ただ、公開するというときに、公開されるべき事柄は親鸞聖人の書かれたテキスト本文ということもありますけれども、その本文を読んできた学びの歴史も公開されていかなければならない。覚如上人の伝授から始まって、蓮如上人、あるいは「相伝」、あるいは高倉までの移行の期間、あるいは高倉の宗学、それぞれ時代の状況のなかで少しずつでも、それ以前の在り方や状況を越えようとしていくということは、教学史のそれぞれの時代のところに私たちは認めていかなればならないと思います。そういうなかに『教行信証』、お聖教というものが軸に置かれていく。そのなかで『教行信証』が本当に多くの人の目に触れる、そういう形が江戸期から明治にかけておこなわれていく。さらに山辺習学氏・赤沼智善氏、あるいは金子大栄先生がそれを講ずる。そういうことを契機としながら、宗派・教団というものにも限定されず、あるいは宗派を越えてさまざまなところに『教行信証』に触れていってほしいということがずっと底に流れている。それが明治以降であろうという感じがするわけです。

そういうなかで、私たちが親鸞聖人の文字に、言葉に本当に直接していく、公開されているものに向き合っていく。これをせずに解釈も研究もありえないということ、そこが一つ大事なところであろうかなという感じがいたします。

（文責：親鸞仏教センター）

研究会の様子

※三木氏の問題提起と質疑は、『近現代『教行信証』研究検証プロジェクト　研究紀要』第２号（2019年３月１日号）に掲載予定です。

清沢満之研究会報告⑱

「他力門哲学骸骨試稿」再読

――自筆原稿の翻刻と読解――

親鸞仏教センター研究員　長谷川 琢哉

現在、「他力門哲学骸骨試稿」（以下「試稿」と略）の再読を行っている清沢満之研究会では、今年度より「試稿」の自筆原稿データの調査にあたっている。「試稿」は結核を患った清沢が垂水での療養中にはじめて「他力門哲学」を論じた画期的なテキストであるが、その原稿には数多くの推敲（すいこう）が加えられた痕跡が残されている。本研究会ではそうした推敲の痕跡も含め、これまで十分に明らかにされてこなかった「試稿」の自筆原稿の読解を進めている。

■「他力門哲学骸骨」という試み

清沢満之の「他力門哲学骸骨試稿」は、1895（明治28）年１月から３月までの間に、結核療養中の垂水において書かれたものである。前年初頭に感冒に襲われた清沢は、当時「ミニマム・ポシブル」と呼ばれる極端な禁欲生活を行っていたこともあり、「一種の行者気取り」によって病を長らく放置していた。その結果、病状はかなりの程度にまで悪化してしまい、遂には半ば強制的に休業・転地療養を勧められることとなった。これを機に清沢は、自身のそれまでの生き方を「自力の迷情」であったと反省し、大きな方向転換を遂げることになる。そして、常に自らの死を意識させられるような病床にありながら、これまでとは異なる宗教的思索を開始した。それが「他力門哲学骸骨」と呼ばれる試みである。

ただし、清沢がこのとき書いたものは、決定稿とはとてもいえない草稿にすぎなかった。

■自筆原稿の存在

2016年に親鸞仏教センターに着任した私は、清沢満之研究会を主催するにあたり「他力門哲学骸骨試稿」を主要テキストとして選択した。そして同年、西方寺・清沢満之記念館を訪れた際に、「試稿」の自筆原稿を直接見せていただく機会に恵まれた。清沢が病床において書いた原稿用紙は、自らの手によって綴（つづ）られた冊子となり、西方寺に保管されていたのである。はじめて見るその原稿には、驚くほど多くの書き直し・推敲の痕跡が残されていた。それまで各種全集等の活字化された「試稿」に慣れ親しんできた私のイメージは、大きく覆されることとなった。

■多数の推敲の痕跡

「他力門哲学骸骨試稿」は、『宗教哲学骸骨』（1893年）と並ぶ清沢満之の代表的な哲学的著作とみなされ、比較的熱心に研究されてきた。それゆえ各種全集版・現代語訳・単行本等として、これまで何度も活字化されている。そして、その度に自筆原稿が底本として用いられ、校訂が重ねられてきたが、数多くの書き直し・推敲の内容については、校訂注などでもほとんど触れられてこなかった。

しかしながら、私が見ることができた「試稿」の自筆原稿に残された推敲の痕跡は、かなりの量を含んでいた。場合によっては原稿用紙の一頁が丸々黒く塗りつぶされ、最初から書き直された箇所なども見られた。こうした推敲の多くは、あるいは単なる書き間違いや修正にすぎないかもしれないし、それは、決して良くはなかった清沢の健康状態が引き起こしたものであるかもしれない。しかし他方で、これだけ多くの推敲の痕跡があるということは、「他力門哲学骸骨」という新たな思索を開始し、それを言葉へともたらそうとするに際しての清沢満之の苦闘が表れている可能性もある。決してスムーズに書き連ねられてはいないこのテキストにおいては、書いては消し、書いては消しというプロセスのなかに、「他力門哲学骸骨」という新たな思索が立ち現れてくる瞬間が刻み込まれているのかもしれない。少なくとも、「試稿」に残された推敲の痕跡をひとつひとつ解読し、可能な限り復元することができたら、これまでとは違う角度から「試稿」を読み直すことができるのではないか。

このように感じた私は、原稿を所有する西方寺およびその画像データの管理を委託された大谷大学に、当センターの清沢満之研究会で自筆原稿の画像データを使用する許可を願い、了承をいただいた。そして2017年度より、その画像データを用いながら、詳細な「試稿」の翻刻・読解を進めているところである。ただし、自筆原稿は、基本的には公開されていない資料である。そのため研究会を通じて何らかの発見があった場合には関係各所と協議した後、しかるべき形で公表できればと思っている。こうした事情があるため、現時点でノートの具体的な内容に触れることはできない。そこで最後に、現在の研究会の様子をごく簡単に紹介し、本研究会のねらいをあらためて確認することで、報告に代えさせていただきたい。

■「他力門哲学骸骨」の根源へ

現在の清沢満之研究会では、担当者である私が画像データを用いて翻刻を行い、それをセンター内部のスタッフと共に検討している。自筆文字の読解に加えて、墨で黒くつぶされた箇所なども可能な限り読解を試みているため、原稿のすべてを確認するにはかなり多くの時間を要している。そしてもちろん、墨塗り箇所を完全に読解することは不可能である。たまたま薄く残っている部分を読み取るのが精一杯である。とはいえ、清沢が執筆に際してどのような修正を行い、それにはどのような意図があったのかということについて、わずかながらではあるが、考えを進めているところである。また、そうした地道な読解を通じて、私にとって、新たな問いも生じてきた。すなわち、そもそも「他力門哲学骸骨試稿」とはいかなるテキストであったのか。少なくとも生前は出版されることのなかった原稿を、病床にある清沢が極度の集中力をもって書き進めたのはいったいなぜなのか。自筆原稿を一文字ずつ追いながら、「他力門哲学骸骨」という試みの根幹を問い直し、あらためてこの書がもつ意義を確かめなければならないと考えている。

（文責：親鸞仏教センター）

研究会の様子

◇BOOK OF THE YEAR 2017◇

「活字離れ」が叫ばれている昨今、親鸞仏教センターではあらためて読書を通した新しい視点、言葉との出会いを大切にしていきたいと考えています。そこで、当センター職員が、2017年に出会った本をジャンルを問わずご紹介します。

『海遊記―義浄西征伝―』

仁木英之著　（文春文庫、2014年）

身命をかえりみず異国へ仏法を求める、あるいは仏法を伝えるために旅をするお坊さんには注目が集まる。玄奘三蔵（602～664）の天竺への旅を題材にした『西遊記』はあまりにも有名である。また、我が国日本へ仏教を伝えた鑑真和上（688～763）には、井上靖の『天平の甍』がある。

しかし、この人の小説があったことにまず驚いた。本書は中国唐代、玄奘帰国の後、インドへ向かい仏法を求めた義浄（635～713）を取り上げ、ファンタジーを織りまぜながら描かれた作品だ。玄奘が陸路で向かったのに対し、義浄は海路でインドへ行く。だからこの小説は、その名も『海遊記』である。

義浄といえば「海」である。だから私は、船で南海を行く義浄のことを、なんとなく爽やかでかっこいいお坊さんだと勝手にイメージしていた。しかしそのイメージは本書によって見事に覆される。ここで描かれる義浄は相当に頑固で融通のきかない人物である。もし隣人だったとすると、きわめて面倒なタイプの人だ。

そんな義浄なので、出航するまでの準備も容易ではない。船での出発には資金がいる。寄進してくれた人への見返りにと揮毫を求められればそれを断り、せっかく集まった資金を仲間に持ち去られるという裏切りにあっても怒ることすらなく動じない。そんな態度が時に周囲の人を呆れさせるが、同時に命をかけて愚直に仏法を求めようとする姿としても描かれている。

（戸次）

『信仰についての対話Ⅰ・Ⅱ』

安田理深著　（大法輪閣、2015年）

この問答の書で、安田理深が語る根本思想は、『真問真答鈔』（『真宗史料集成・第5巻』同朋舎出版、『真宗大系・第36巻』国書刊行会）、『法然内裏問答』『本願帰命之十ヶ條』（『昭和新修法然上人全集』平楽寺書店）、これら「伝法然」著作で述べられる「南無は阿弥陀仏である」という思考と同一である。幾百年の時を隔て再び「真問真答」が現出するその様は、まことに驚くべきものである。現生成仏の、『安心決定鈔』の表現を借りれば、「身を極微にくだきてみるとも、報仏の功徳のそまぬところはあるべからず」というこの思考を誤読せぬためには、これが「身を極微に砕きて見るとも、罪悪の染まらぬところなし」と言っていることに気がつかねばならない。それをこの書では「宿業の自覚」と表現するのである。

（越部）

『責任と判断』

ハンナ・アレント著
ジェローム・コーン＝編　中山　元＝訳　（ちくま学芸文庫、2016年）

アレントがここ数年ブームになっている。決して、読み解くのが簡単な思想家ではないと思うが、それでも読まれ続けているのは、彼女のメッセージが現代人に欠如するものを指摘するからだろう。

> 道徳的な事柄で問題となるのは個人の行動であり、法廷ではこれが問われるのです。もはや「この人物は、小さな歯車だったか、大きな歯車だったか」が問題ではなく、「この人物は、そもそもどのような理由から、歯車になる事に同意したのか」が問われるのです。（255頁）

私自身は、自分が歯車であることを拒否しながらも、毎日回している。歯車であることの拒否はできるのだろうか。その可能性にかかわらず、アレントの指摘は思考なき現代人にまっすぐ届くのである。

（田村）

『人間の居場所』
田原　牧著　（集英社新書、2017年）

本書は、現役の新聞記者によるエッセイ集である。その内容は、シリア難民、ＬＧＢＴ（レズビアン・ゲイ・バイセクシャル・トランスジェンダーの頭文字を組み合わせた性的少数者を指す略称）、暴力団、子ども食堂、磯釣りなど多岐にわたる。この、一見バラバラで無関係にも思える「断片」、そこにある人びとの姿を丁寧に描写することで、見えなくなっていた、しかし確かに感じていた「人間の居場所」が浮かび上がってくる。

「戦後七十年余の現在、多数派の人びとは戦前と同じ轍を踏むことを躊躇していない」。筆者が見据えるのはその先のことである。「灰燼と化した社会に再生の機会が訪れればというあくまで前提付きの話だが、そのとき、狂気が覆う世界の下でも正気だった人びとがいなくてはならない」。そう、この一冊は懸命に生きようとする《あなた》のために書かれたのだ。　（法隆）

『ネガティブ・ケイパビリティ　答えの出ない事態に耐える力』
帚木蓬生著　（朝日新聞出版、2017年）

ネガティブ・ケイパビリティとは「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」を意味する。詩人のキーツが発見し、精神科医ビオンによって再発見されたこの能力は、対象の本質に深く迫る方法であり、相手が人間なら、相手を本当に思いやる共感に至る手立てになるという。

作家であり精神科医でもある筆者は、実際の臨床の現場でこのことを実践している。例えば終末期の患者と対峙したとき、目の前の事象に拙速に理解の帳尻を合わせず、解決できない状況を持ちこたえていくことにより、真の共感が生まれ、それは患者の救いにもなっていく。

性急に問題を解決することが能力だと思いがちだが、そうではないことに本当に大切な意味があることをこの書は教えてくれている。

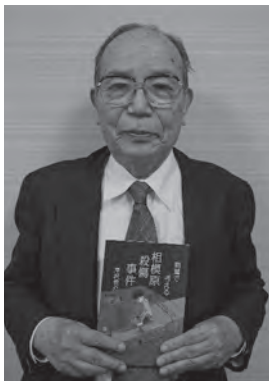
（大谷）

『親鸞で考える―相模原殺傷事件』
芹沢俊介講述　（東京一組　よにん会、2017年）

知的障害者施設の職員であった男が教員採用試験に落ちて挫折を体験。「障害者は不幸を作ることしかできない、だから抹殺すべきだ」「全人類が心の隅（すみ）に隠した想（おも）いを声に出し、実行する…」と、元（もと）勤めていた施設の19人を殺害し25人に重傷を負わせた。

芹沢氏は、マスコミでは触れていなかった実情に迫り、「この事件の背景にある考え方が“善人正機”」であり、事件は「聖道の慈悲の限界を教えてくれているのではないか」と。そして、親鸞の言葉を支点に、「存在自体が悪だとすれば、まさに悪人正機というところに立てるわけで、“あの人たちこそが救済の正機なんだよ”と言えるところに立てる」と思うと言って、聖道の慈悲の挫折を受け入れる大地を明らかにする。

（中津　“ ”は筆者）



※本書籍に関するお問い合わせ先
TEL：03－3844－1990
e-mail：tokyoisso24@gmail.com

『沈黙』
遠藤周作著　（新潮文庫、1981年）

「転ぶ」。それは、迫害のなかでのいわゆる棄教であり、挫折を意味する。が、信仰を全否定することではない。本書の主題は、信順しつつも、相（すがた）として否定していく。それを「裏切った」とみなす。実は、その意識との闘いであるといえる。

ただ、理由はどうあれ、「転ぶ」とは、総じて保身する「弱さ」である。しかし、その苦悩する歩みは、「赫（かがや）かしい殉教」という観念、すなわち「強さ」のもつ虚偽性を照らし出す鏡になっている。

肝心なのは、自身の宿す「弱さ」と向き合い続けているのか否か。その苦しみ、いたみを分かち合おうとする、主の「沈黙の声」（声なき声）が聞こえるか、それに順おうとするのか否か。

如来大悲の本願のなかで、「罪を自覚することこそが、願いを回復することになる」というお言葉が、合わせて想い起こされてくる。

（菊池）

近現代『教行信証』研究検証プロジェクト
研究紀要　創刊号 発刊！

価格1,000円（送料込）
発行：2018年３月１日

《巻頭言》
総合プロジェクト『教行信証』検討構想…… 本多 弘之
《研究会報告》
解釈の転換
――私感：『教行信証』の近代――…… 安冨 信哉
《研究論文》
山辺習学・赤沼智善『教行信証』再考
――「『教行信証』の近代」発掘を目指して――…… 名和 達宣
『教行信証』撰述の意図をめぐる研究の展開
――元仁元年の意義を中心に――…… 藤原　智
『教行信証』の構成について …… 青柳 英司

■親鸞仏教センター、教学研究所、大谷大学真宗総合研究所東京分室での三機関共同研究事業「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト」における研究成果第一弾！！『教行信証』に顕された時代の闇を破すべき真実の道理を現代に発信するという視点で、今後の研究活動の前提となる『教行信証』研究の変遷や読法などを丁寧に検証しています。

■お申込みとお問い合わせ
親鸞仏教センター
〒113-0034　東京都文京区湯島２-19-11
TEL 03-3814-4900　FAX 03-3814-4901
E-mail　shinran@higashihonganji.or.jp

リレーコラム
「近代教学の足跡を尋ねて」第14回（南江堂）

門下生の一人である安藤州一が伝えるところによれば、清沢満之は熱心にドイツ人哲学者のロッツェを読んでいた。大谷大学図書館に所蔵されているロッツェ関連の書籍の多くは清沢が購入したものであるという。実際、谷大図書館で調べてみると、当時を偲ばせる痕跡を見いだすことができる。たとえばロッツェのある書籍の裏表紙には、「NANKODO 東京市本郷区湯島切通町八番地」とプリントされたシールが貼られている。「NANKODO」すなわち「南江堂」とは、1879年に創設された洋書の輸入販売を行う書店である。真宗大学が巣鴨にあったころ、初代学監であった清沢が南江堂書店を介してロッツェの書籍を購入し、それが現在の谷大図書館に受け継がれているといったところであろうか。ちなみに「湯島切通町八番地」という地名は、親鸞仏教センターから徒歩数分の場所にあたり、現在は医療系書籍の取り扱いに特化した「株式会社南江堂」のビルが建っている。南江堂ビルの前を通るたびに、私はいつも明治期の本郷・湯島の地に思いを馳せている。

（長谷川）

行事日程のご案内

■親鸞思想の解明
日　時：2018年３月９日（金）18時30分～20時30分
　　４月　　休講
会　場：東京国際フォーラム　ガラス棟（Ｇ棟）

■ご命日のつどい
日　時：2018年３月９日（金）10時～11時30分
　　2018年４月13日（金）10時～11時30分
　　2018年５月11日（金）10時～11時30分
会　場：親鸞仏教センター仏間

あとがき

今号では山根道公氏をお招きした「現代と親鸞の研究会」の研究会報告を掲載している。

山根氏には、遠藤周作と井上洋治神父の生涯を主にお話しいただき、井上神父は「キリスト教を日本人の心情で噛み砕いて自分のものにし、日本語で表現する」ことを遠藤と共に自分の使命としたとご紹介いただいた。

親鸞仏教センターにおいても、親鸞聖人の思想を現代の日本語でいかに伝えるか日々模索している。言葉は、まるで生きているがごとくに新しく生まれ、死んでいく。おのずとその時々に合った表現方法は変わってくる。ゆえに、同じように変わり続ける世の中に目を向け続け、新たな表現方法を探っていかなければならない。　（田鶴浦）